神戸高商 大阪高商 県立神戸高商の仲

淡水会　学部７回　昭32年卒　野田五郎

旺盛な寄付文化　大阪

江戸時代の大阪は幕府直轄で奉行所があり役人もいたが、幕府は大阪町政にカネを出したりしていない。町は税で運営されたが、只納税していたのは１部の金持で、堀や橋といった公共の建物は裕福な商人の寄付でできていた。淀屋橋のように寄付した人の名のついたものもある。当時は士農工商の身分差別時代で商人は最下層だったが、大阪では商人は敬意を集めていた。大阪商人は殆どが敬虔な佛教信者で南北御堂の大伽藍の見える船場に住みたがり、朝に夕に仏壇を拝み、商売で儲けたカネは世間から預かったもの、世間に返さなればならないと思って暮していた。こうした大阪商人の公け心は江戸時代にできたが明治以後も続いた。中之島中央公会堂は大正７年に株で大儲けした岸本栄之助氏の寄進だ。あんな豪華絢爛な公会堂は他に例がない。百年を過ぎた今も現役で使われている。

寺子屋と懐徳堂

浪速文化の今１つの特徴は学問を大切にする習慣だ。商売には読み書き算盤が必要で人々は子供を競って寺子屋に通わせた。江戸時代大阪の寺の多さは日本１、寺子屋の数も日本１だった。そのせいで大阪の識字率は日本１だった。当時世界１の文化都市とされたロンドン市民の識字率を上回っていたとされ、幕末開国で大阪にやって来た西欧人がそれに驚き、日本の植民地化を断念する理由になったとされている。

1724年 享保９年に鴻池善右衛門の寄付で本邦初の学問所 懐徳堂ができた。幕府はそれを知って各藩に学問所の創設を勧め、幕末になり多くの藩が藩黌と呼ぶ学問所を開いた。水戸藩 佐賀藩の弘道館 会津藩の日新館 加賀 名古屋藩の明倫館 備前藩の閑谷館 肥後藩の時習館 薩摩藩の造士館がそれだった。只こうした藩黌は藩士の子弟教育が目的だったが、懐徳堂は一般庶民が対象で身分差別はなかった。そこが懐徳堂と藩黌との大きな違いである。身分差別のない大阪は江戸時代に民主主義の素地ができていた。しかも懐徳堂の月謝は銀１匁、現価に換算すれば1758円、桁外れの安さだった。貧乏人でも子供を通わすのに支障がなかった。懐徳堂は寛政年間に出火で全焼したが、僅か４年で多くの人達の寄付で再建された。これも凄いではないか。懐徳堂は維新で閉鎖されたが、阪大の西尾章治郎総長によれば今の大阪大学の始祖は懐徳堂と適塾だそうだ。適塾とは江戸末期に緒方洪庵が北浜に開いた蘭法医学塾で新しい西洋の学問を教え、福沢諭吉も適塾で学んだ。適塾の

建物は今も現地で公開されている。

藩黌が教えたのは主に論語と日本史であり儒教である。儒教とは主君や親の恩の大切さを教える学問である。つまり儒教社会では謀反(むほん)が起きない。だから江戸幕府は儒教を支援した。只、儒教は伝統を尊ぶので新しいことをするのは、苦手で、中国や韓国の開国が遅れたのは儒教が国教だったからと言われる。日本でも忠孝は基本倫理で忠臣蔵の人気が衰えないのはそのせいだ。しかし日本の国教は神道である。幕末に福沢諭吉や吉田松陰が新しい思想の教育を行ない、適塾や松下村塾で学んだ人物により討幕と開国が行なわれ明治維新が成し遂げられた。儒教には功罪２面あることを認識するべきである。

大阪帝大と大阪高商の設立

戦前日本には帝国大学が７つあった。只その１つ大阪帝大には他と違う点がある。それは驚く勿れ大阪帝大の設立には文部省がカネを１銭も出さなかったことだ。大阪帝大は創立資金と当初３年間の運営費全額を地元負担という条件で６番目に帝大に認可された。開学が５月というのも認可時期がずれ４月開学が間に合わなかったせいである。文部省に最終説得に上京していた人達は東京駅で決ったと知らされ、その場で皆で抱き合って喜んだ。しかし大阪医専が最初に昇格申請したのはまだ明治だったが、文部省は京大と近いという理由でその後もずっと却下し続けた。それにしても帝国大学の設立資金全額を地元負担なんて常識では考えられない。阪大は大阪人の公共心と向学心旺盛のシンボルである。

この４月に大阪公立大になった大阪市大は創立時から市立だった。しかし３商大と言われたのに、なぜ大阪だけが市立なのか。それには訳がある。東京に高商ができたので大阪と神戸は揃って高商設立申請をした。しかし明治 33 年の帝国議会は関西に２つも高商は不要として、71 対 70 の僅か１票差で神戸を認めて大阪を却下した。すると大阪は「それやったら自分で作るわ」と言ったので大阪高商は市立になった。しかも神戸高商の創立は明治35年で大阪高商はその１年前の34年、大阪人は神戸に負けるのは許せなかった。

それにしても１つに絞るなら大阪じゃないのか。これは勘ぐり過ぎかも知れないが、維新で商業の先進化を図る必要があるという渋沢栄一の提言で、政府は明治８年に東京に商法会議所を開設した。これは後に東京商業学校を経て今の一橋大学である。続いて同 11 年に兵庫県令森岡昌純の申請で政府は神戸商業講習所を作った。これは県神戸商 俗称県商を経て今の県立星稜高である。更に同 13 年に五代友厚の指導で大阪商業講習所ができた。これは大阪高商を経て今春大阪公立大になった。つまり大阪より神戸の方が商業講習所設

立は２年早かった。それが議会が神戸高商を認めて大阪高商は却下した理由でないか？

県立神戸高商の設立

私の通学した昭和30年前後の神戸商大は隣設の県商後身の星稜高と共に垂水の丘の上に聳え建っていた。通学バスを更に奥に約１キロ程行くと垂水ゴルフ場があったが、それ以外に民家は１軒もなく、大学の裏は遥か彼方(かなた)迄見渡す限り荒涼たる禿山だった。私が卒業した後神戸市は大規模な宅地開発によりかつて禿山だった垂水丘陵一帯は人口数十万の大住宅地になり、神戸地下鉄が西神ニュータウン迄行き来するようになった。

昭和３年の春にこの垂水高丸ケ丘の麓のお屋敷に住むこの丘の地主で鉄工所経営の駒井さんが田口政五郎垂水町長を訪れ「宇治電からこの土地を分けてくれと要請があった。垂水の振興のためこの山を開発したい」と町の意向を打診した。宇治川電力とは今の関電の発電部門の前身で当時は山陽電車もその経営の１翼を担っていた。田口町長は明石の造り酒屋の子息で六高 東大 兵庫県議を経てこの月に垂水町長になったばかりだったが、官立神戸高商が大学昇格するので新校地を物色中と耳にしていたので駒井氏にそう告げると、氏は「商大が来るなら土地は寄付する」と大乗り気になった。そこで町長は大急ぎ上京して文部省を訪ねると、カネのない文部省は願ってもないと新商大の垂水立地を内諾した。

そこで町長は早速官立神戸高商を訪ねて垂水に来てくれと頼んだ。しかし当時の垂水は片田舎の漁師町だったので多くの教員が垂水行きを嫌がった。用地探し担当教官は西宮の上ヶ原に行く積りと言って垂水を断った。しかし同じ神戸上筒井にいた関西学院も引っ越す予定で既に行先を上ヶ原と決めていた。この人はそれを知らなかったようだ。

当時垂水にはまだ今のJR 省線電車が来て居らず大阪から汽車で２時間かかった。そんな不便な所に行くとこの年大学になる大阪商大に新入生をごっそり奪われないかと恐れた。これが垂水を断った本当の理由である。新商大は上ヶ原が関学に先を越され用地探しに行き詰まった。うるさ方の凌霜会や財界のお歴々に急がされて担当者は狼狽え、遂に平生釟三郎氏がこの用地問題に乗り出して来た。平生氏とは甲南学園の創始者で、経営不振の川崎造船を立て直し、後には文部大臣になった神戸のドンである。当時神戸に平生さんに楯つける人は居ない。凌霜会も宇治電も口をつぐんだ。その後六甲台が見つかって１件は落着した。とは言っても六甲台は急傾斜で整地にカネがかかった。程なく明石迄電車が行き垂水は便利になった。もし新神戸商業大があの時垂水を応諾していたら神戸大学本部は垂水になっていた。

神戸高商の大学昇格が遅れ、大阪高商がお先にちょっと失礼

文部省は東京高商を大正９年に商大に昇格させ、続けて神戸高商も昇格させる手筈にしていた。ところが12年９月に突然関東大震災が起きて国は東京復興に厖大な資金が必要になり、文部省はそれどころでなくなった。この震災で昇格が保留されたのは他に東京高師(現筑波大) 広島高師(現広島大) 東京高工(現東工大) 大阪高工(現阪大工学部)があった。

関東大震災復興が思うように進まない中で昭和に入ると世界経済は大恐慌に陥り日本も巻き込まれた。ところが大阪市が突然大阪高商の昇格を昭和３年４月と決めた。それを知った神戸高商は文部省に早く昇格させろと矢の催促をした。文部省はせっつかれて渋々認可したが予科専門部の並設は当然ながら見送った。(神経大予科は昭和16年に設置承認された)大阪帝大の設置費用を丸々地元に押し付けたり神戸高商の大学昇格を躊躇っていたのも背景は同じカネの問題だった。

しかしそんな財政ピンチの中なのに大阪市はどうして高商の昇格を決められたのか。実はその頃の大阪財政は国とは全く様相を異にしていた。日清日露戦争の勝利で大陸との交易が増え関西経済は活性化していたところに、第１次大戦で日本は戦勝国入りをしてドイツの中国権益を手中にしたので、関西経済は発展に益々拍車がかかった。大正末期に大阪市の人口は東京を上回り、経済の規模も東京を追い越していた。大阪は名実共に日本１の大都会だった。大阪にはカネ不足問題などなかったからである。

県立神戸高商の設立と伊藤新校長の対抗心

官立神戸高商の大学昇格はこうしてやっと決った。しかし予科も専門部も併設しないと伝わると、県商のOBと父兄が「学生は一旦県外の高商に行かんとならん。そんなら自分達の手で県商を高商に昇格させようや」と動き出して神戸財界もそれを支持した。ところがこの動きに兵庫県知事の長遠連が突然「それなら県が新しい高商を作る」と言い出して、県立神戸高商の創設は藪から棒に決まった。もし新神戸商業大に予科が併設されていたら県立神戸高商は生まれていない。正に瓢箪から駒だった。旧学制世代には神大と神戸商大の区別のつかない人が大勢いる。これが神戸には似た大学が２つあったいきさつだ。

垂水の田口町長は新神戸商業大に垂水の丘陵地を１蹴されたが、県が高商を新設すると知ると駒井氏の申し出をそのままそっちに向けた。無論駒井さんも大賛成で３万坪の土地提供を確約した。直前は兵庫県議だった田口町長は県には顔がメッチャ広く、支障は何もなかった。県立神戸高商は県商に４教室を借りて昭和４年４月22日に入学式を行なった。

校長には大阪高商教授で校長事務取扱経歴がある伊藤真雄教授が指名された。

伊藤校長は小躯ながらも早速デッかい建学指針を示した。その１、本校を学問レベル日本１にするである。校長がそんな大きな目標を掲げたにはその背景に大阪高商とそのライバル校の神戸高商をイメージしたに違いない。ところがその校長指針は学生だけでなく全教員に浸透して関係者全員がこの学校を日本１にしようと動き始めた。旧学制時代の日本にはどんな商系の専門校があったか、巻末にその校名を並べたのでご参照されたい。「神戸高商は日本１」は忽(たちま)ち本校の合言葉になった。私の在学したその25年後も「商大来るなら神戸においで、神戸商大は日本１」「高丸丘から飛び立つ鳥は鳥でも天下取り」という14節からなる商大小唄(高商音頭)の唄えない学生は１人もいなかった。ゼミのコンパでは教授が真っ先にこれを唄った。毎入学式の翌夕方には大講堂で新入生歓迎会があり、各運動部員が部員勧誘に出て、新入生全員に学歌 応援歌 商大小唄を徹底的に教え込むのが慣例だった。新入生はこの日初めて大っ平に飲酒して大学生になった喜びを噛みしめた。

伊藤校長の２つ目のスローガンは文武両道である。しかもこれも尋常でなかった。校長は初年度に全生徒の運動部加入を制度化した。それは自らのケンブリッジ大の留学体験が影響したに違いない。各運動部には神戸や大阪の中学の有名選手がドッと入学し各教室は彼等がズラリと顔を並べていた。校長は当初ラグビーかボートを校技に指定したかったようだが流石にこれは実現できなかった。学校は総力を挙げ各運動部活動を支援した。東京高師出たての若い楢崎正雄体育学助教授は身を粉にして各運動部の強化に努めた。学校創立五十年史や各運動部の創部記念誌には当時の運動選手の「楢崎先生のあの熱意は生涯忘れられない」という謝意と賛辞に満ちている。

こうした学校の真剣な運動部支援が実り、学生数僅か500人足らずの新設校の野球 サッカー バレー バスケット ラグビーの各部は僅か数年で関西学生球界の最高位に躍り出た。しかしこれには当時官立神戸商業大が各種スポーツ種目で大活躍していたことが刺激になった。各運動部は「商大に負けるナ」「商大を倒そう」をスローガンにしていた。

校長の３つ目の提唱は「スマートであれ」である。当時の高専生は弊衣破帽が多かったが、校長の頭には身だしなみの小ざっぱりした英国学生が焼き付いていたに違いない。彼はバンカラを嫌い、身辺を小綺麗にすれば精神も健全になると説いた。学校生え抜きの三戸雄一英文学教授は50年記念誌で「スマートであれと説いた校長の真意は学生にお洒落をしろと言っていたのではない。学生の左傾化を警戒したに違いない」と述懐している。当時著名な経済学者や評論家がマル経に転じていた。明治34年に社会民主党が結党して

後に日本共産党と農民労働党に分離して昭和になると革新勢力が力をつけて活動を活発化させた。当時は軍も無理押しを始めていたが同時に学園の左傾化も負けず進んでいた。

戦争末期と戦後の神経大と神経専の連携行動

戦争が激化すると「商業」という語は戦争遂行に宜しくないとされ、昭和19年4月に商業大学は経済大学に高等商業は経済専門に一斉に校名変更させられた。昭和20年1月に神経専は学園を海軍経理学校に接収され、その3日後生徒は勤労動員を中止して机と椅子を六甲台の神経大本館にエッサエッサと運んだ。移転先選定は軍がした訳でなく、多分垂水に頼み込まれ六甲台が引き受けたのではないか。両校の連携が良かったからである。しかし動員で六甲台では講義は1回もできず、4月の当年度入学式も7月にずれ、しかも大半の新入生はこの3ケ月間に軍に応召されその何人かが戦死した。入学式に出たのは半数以下という大変な時代だった。学校は33年後に改めてその年次の入学式と合わせてこの人達の入学式を行なった。既に中年になった新入生達は式後正門横に昭和20年度新入生戦没者慰霊碑を建立した。六甲台に寄留していた神戸経専は終戦後の9月1日に再び全員で机と椅子を垂水に運び戻した。

同年10月から神経専は半年間の日程で繰り上げ卒業した14・15回生と神経大予科卒業の希望者を対象に補修講座を開いた。時間が足らず補修は夜間に教授私宅に及んだ。そしてこの受講生30数名全員が21年度神戸経大の入試に合格した。その中には後に神大学長になる新野幸次郎氏もいた。しかし戦後1ケ月半の混乱の中、しかも既に卒業した学生や他校卒業生も対象に補修をした高専大学は他に例がない。実にアッパレでないか。

終わり

3商大　横浜商専の学校名変遷

私塾商法講習所→府立東京商業学校 → 官立東京高等商業 → 官立東京商科大学 → 国立一橋大学

官立神戸高等商業 → 官立神戸商業大学 → 官立神戸経済大学 → 国立神戸大学

私立大阪商業講習所 → 市立大阪商業学校 → 市立大阪高等商業 → 大阪市立大学 → 大阪公立大学

私立横浜商法学校 → 横浜市立商業学校 → 横浜市立商業専門学校 → 横浜市立大学

旧制時代の商系高専とその設立年次

官立東京高商 M20　市立大阪高商 M34　官立神戸高専 M35　官立長崎高商 M38　官立山口高商 M38

官立小樽高商 M44　私立高千穂高商 T3　官立台北高商 T8　私立大倉高商 T8　官立名古屋高商 T9

官立福島高商 T10　官立大分高商 T10　官立和歌山高商 T11　官立彦根高商 T11　官立京城高商 T11
官立横浜高商 T12　官立高松高商 T12　私立松山高商 T12　官立高岡高商 T13　市立横浜商専 S3
私立巣鴨高商 S3　県立神戸高商 S4　私立同志社高商 S5　私立鹿児島高商 S7　私立浪速高商 S7
私立福岡高商 S9　私立関西学院高商 S10　官立大連高商 S16

（設立年不詳）私立日本女子高商　私立善隣高商　私立甲陽高商　私立福知山高商

高商音頭　（商大小唄）

高商音頭　後の商大小唄は昭和６年 11 月に新装なった神戸高商の新学舎で第１回の記念祭が開かれ、その出し物コンテストで、全員揃いの浴衣姿のラグビー部がこの唄で踊り最優秀賞になった。元唄は部員村岡敏郎の郷里の舞鶴音頭である。村岡氏は創部五十年史で「垂水に下宿していた小山一之 吉田要 吉田拓三君と４人で戯れて替え歌にして皆でよく歌っていたが、歓崎豊君がこれを記念祭の出し物に使おうやと言い出し、岡部誠一君宅の二階で毎晩美しいお姐さんに振り付けて貰って練習を重ね、その甲斐あって記念祭で最優秀賞を頂いた。当初は少し恥ずかしかった」と述べている。

高商音頭

1　高商来るなら神戸にお出で　神戸高商は日本一　よいとこ播磨の垂水町（まち）
寄ってけ寄ってけホイサッサ　何がどうじゃい　どうじゃいな

2　腰の手拭い伊達には下げぬ　魔除け　虫除け　女寄せ　（以下は繰り返し）

3　高丸丘から飛び立つ鳥は　鳥は取りでも天下取り

4　港神戸は船では保たぬ　高商健児の意気で保つ

5　朝の参りは海神様へ　願を解くやら　かけるやら

6　偲ぶ恋路の霞ヶ丘に　今宵名残の雨が降る

7　通う千鳥に文（ふみ）こと寄せて　もしも知れたら須磨の海

8　沖の漁火（いさりび）夜ごとに燃えて　淡路恋しや　懐かしや

9　私の心は舞子が浜よ　他（ほか）に木はなし松ばかり

10　恋の流人か舞子ケ浜よ　今日も啼くよな浜千鳥

11　枝は折るまい　折らせもすまい　燃ゆるつつじの五色山

12　汲んでおくれよ私の心　垂水乙女の初情け

13　船は出て行く神戸の港　行くや淡路の浜千鳥

14　明石女郎衆についほだされて　一夜泊りが又一夜